「野分き立つ」

川崎照代 作

登場人物

内藤宗一	(七十六歳)	築四十年の家屋に現在、佐和子、綾子と三人で生活
佐和子	(四十五歳)	宗一の妻　現在管理栄養士
邦彦	(二十二歳)	長男　北海道大学生
綾子	(二十歳)	長女　短大生
山村健二郎	(五十八歳)	鈴子の夫　海外出張多く、ロンドンより帰国　定年間近
鈴子	(五十歳)	宗一の長女　健二郎の妻　内藤家相続人
大月タカ	(六十九歳)	宗一の妹
野本	(三十歳)	
内藤[illegible]		十六年前三年間遥拝　大丸建設設計部勤務

時　一九九四年秋

所　東京――古くからの住宅街の一角にある、内藤宗一の家

舞台　築四十年以上の木造家屋。
和室を板張りに替え、二間をぶち抜いて使っているが、天井や壁、欄間などそのままで、ちぐはぐな感じ。
上手奥に玄関。正面はガラスの引き戸。その奥に廊下を挟んで客間、宗一の居室。
下手寄りのガラス戸はテレビ、サイドボード、電話台などで引き戸の一枚を残して塞がれている。
上手手前にドア。その先に綾子の部屋と廊下の突き当たりに便所。奥寄りに二階への階段口。
上手側に古びたソファ、椅子、テーブル。下手側にダイニングテーブルと椅子。
下手手前から台所に通じる。
全場を通じて変わらない。

四場
TC2用

宗一　いつもの調子なもんか！　どこを見てるんだ綾子は。変だぞ佐和子は。
綾子　変て何が。
宗一　うむ。馬鹿丁寧な言葉遣いするんだ。思ってらっしゃいますのとか、致しますとか、何だか……他人行儀なんだ。
綾子　実の娘が突然娘面して現れたから自分が他人だってことに気付いたんじゃないのお母さん。
宗一　他人？　――わたしは他人か！
綾子　他人でしょおじいちゃんとお母さんは。
宗一　……わたしは他人なのかこの家で。
綾子　大丈夫。あたしはおじいちゃんとしっかり血のつながりあるから。
宗一　邦彦が言ったんだな。佐和子にわたしとは他人だと。
綾子　知らないわよ。あたしお部屋片づけてたんだから。全くもう！　お兄ちゃんに振り回されて変になったのあたしの方なんだからねっ。（去る）
宗一　……どうしちゃったんだよ佐和子は……。

宗一、不安気に階段下まで行き、見上げる。

四

前場より二、三週間後の日曜日。
野本が上手のソファに坐っている。傍らに大きな風呂敷包みと円筒。
佐和子が盆を持って困惑気に立っている。

佐和子　どんなって……。
野　本　御主人ですよ。御主人の人となり。
佐和子　はあ……。

野　本　室長と同期だそうですね。残念だなあ。生きてらしたら間違いなく御主人の方が上司ですよ。

佐和子　河村さん、室長になられたんですか。

野　本　ライバルだったって言ってますがね、冗談じゃない。御主人は歯牙にもかけなかったと思うなあ。発想が違いますよ発想が。残念だなあ、御主人の下で働きたかった。ア、ここに置いてください。

佐和子　は？　ああ、どうぞ。（盆ごとテーブルに置く）

野　本　いやあ奇遇です。室長に誰か個人住宅に興味あるやつはいないかって言われて名乗りを挙げた時はまだ依頼主のことは知らなかったんですから。

佐和子　本当によろしいんでしょうか。

野　本　やります内藤融氏邸。

佐和子　あの、実は――。

野　本　大丈夫。バイトはみんなやってるんです。住宅誌で設計相談のコーナーがあるでしょ。ああいうのみんな僕らみたいな者のアルバイトですよ。うちの社、新開発リゾートを丸ごと受けるとか、公共施設とか大型プロジェクト中心でしょ

う。うっかりすると一体全体自分が何やってるのかわからなくなってしまうんだなあ。休日、建築雑誌めくってて個人住宅見るとホッとするんですよ。あれですよきっと御主人も息抜きに描いてたんだ。

佐和子　……は？

野　本　御存知でしょう、建築業界の談合、癒着。摘発こそまぬかれましたがうちの社だって似たようなことしてるわけですよ。おまけにバブルの崩壊だ。碌な仕事がない。状況は違うけど、あの頃も確かオイルショックで不況の真っ最中だったんでしょう。建築業界も大変だったらしいから。手がけてらしたプロジェクトもどう見ても夢は感じられないんだなあ。

佐和子　あの、内藤が手がけていたって？

野　本　没になったんです御主人の死後。

佐和子　没に……。それ、大きな仕事だったんですか。

野　本　ある大手不動産業者と提携で一大リゾート地を作るってものです。ホテル有りマンション有りレジャー施設有り何でも有りのね。全国的なリゾート開発ブームの前ですからね。企画としては他を一歩リードするものだったようですが、御

主人乗り気じゃなかったみたいだなあ。だけど図面引けって言われれば僕らは社の方針通りの仕事をするしかありませんからね。

佐和子　そうだったんですかそれであんなに連日……。

野　本　こんな家造りを理想とする御主人が満足する企画じゃありませんよ。リゾート地のマンションは何の為に買うんですか。ゆったり気分を満喫したいからでしょうが。それが金儲けのみを目論んだ、できるだけ戸数をふやして見栄えをよくしてって。没になって当然でした。

佐和子　そうですか。それが内藤の最後の仕事だったんですか。

野　本　最後の仕事はこれです。（風呂敷包みをテーブルに置き、包みを解いて）僕はこれを「光と風の家」と名付けました。

佐和子　これは……？

野　本　内藤融氏邸。

佐和子　……は？

野　本　この模型は僕が造りました。

佐和子　まあもうそこまで考えて下さったんですか。

野　本　考えたのはご主人です。（筒から設計図を取り出して）これを元に造ったんです。ア、そっち行きましょう。

野本包みと設計図を持ってさっさと部屋の真ん中に行き、どっかと胡座をかいて坐る。

佐和子戸惑いながら野本に従う。

野　本　この図面を見て本当に自分が手がけたいものは何なのかとわかってきたような気がしましてね。それで造ってみたんです。いやあ、楽しかったですよ。週末が待ち遠しくって。

佐和子　あのう……内藤融邸って……。

野　本　この図面、御主人が引かれたものです。

佐和子　内藤がですか！（図面を野本から奪い取って）内藤融邸……内藤の字ですわ。――これ何処に？

野　本　例の、没になったプロジェクトの資料に挟まれてました。いやあ僕はもう、これぞ運命の出逢いと言うべきものだとつくづく感じ入りました。――いいです

か。僕は二年前のある資料を探しに資料室に行ったんです。三ヵ月前のことです。何故十五年前の、しかも没になった資料が僕の頭めがけて落ちてこなければならないんですか。バサッと僕めがけて落ちてきてこれみよがしにこの図面が眼の前に広がったてのはですね。しかもですよ、こうやって今僕はこの図面の持ち主の内藤邸に胡座かいてる。これを運命と言わずに何と呼べるんですか。ね！

佐和子　あのひと建て替えるつもりだったんですねこの家を。十五年も前に。

野　本　いい間取りでしょう。住み心地第一。どの部屋にも光と風が満ちあふれています。だからって窓ばかりじゃない。日照、方角。計算されつくしてる。二世帯住宅がようやく出始めた頃なんですよ十五年前というと。埋もれてたのは残念至極。これ今でもモデルハウスに使えます。しかもこの家は違反するところがない。今時東京で建築基準法に抵触しない家なんて至難の技ですよ。下がったと言ってもまだまだ地価は高いですからね。土地をめいっぱい使って広く広くって。きっちり守ってどうしてこんなゆったり感が出るのかそこんところが僕には——。

佐和子　ここ、リビングルームですね。

野　本　隣の食事室と一体になってます。大きなダイニングテーブルに機能的な対面式のキッチン。風呂場も洗濯室もゆったりで働きやすそうでしょ。ここ御両親の居室。今でこそ珍しくありませんが洗面トイレ付きです。応接間がないのお気付きですか。家族の団らんを第一に考えた設計ですよ。なにかというと家族がリビングに集まってワイワイガヤガヤ。

佐和子　全天候型物干し場……？

野　本　雨や雪の日ボタンひとつでスライド式に屋根と壁が降りてくるんですね。風の日もいいだろうなあ。いろんなアイデアが隠されていて飽きないんだ。

佐和子　部屋の中に洗濯物干すのとても嫌ってました。

野　本　御両親御健在ですか。

佐和子　……義母はもう。

野　本　（メモを取り出して）おかあさんはなしと……。お子さんは同居ですか。

佐和子　……娘が一緒ですが。

野　本　おいくつ？

佐和子　……二十歳です。

野　本　とすると近年結婚もありますね。やがてお子さんと同居の予定は？

佐和子　あの――それ私のことでしょうか。

野　本　三人のうちひとり位は同居なさるでしょう。いやみんなが住むと言い出すかもしれない。なにせ東京の土地は高い。となると二世帯どころじゃない。四世帯！　ちょっときついなあ。

佐和子　あのう、三人て……？

野　本　お子さん三人でしょ。

佐和子　……私でしたら子供はふたりですけど。

野　本　だってほらちゃんと三人分――。

佐和子　（図面を見て）二階のここ、子供部屋なんですね。

野　本　ええ。

佐和子　……ベッドが三つ有る……。机も三つ。

野　本　ああそうかあ。ふたり生まれたところで死んじゃったんだ。そうかあ僕はてっきり――……。

佐和子　子供が三人だなんてあのひとそんなこと一度も口にしたことなかったんですよ。……そんなに子煩悩でもなかったのに……面倒なんかちっとも見てくれなかったのに……。

野　本　まいったなあ。変なもの持ち込んじゃった。

佐和子　いいえ。すこしばかり気持が晴れました。仕事仕事で家のことちっとも考えてくれなかったとずっと思ってましたから。何だか救われました。

野　本　お茶いただきます。（ソファへ向かいながら）おかあさん御病気でしたか。

佐和子　喘息で長く……。

野　本　なるほど。納得。一階部分はカーペット無しの床暖房です。当時高かった筈ですよ。最近ようやく普及し始めてきましたがね。メモ書きがあるでしょう。いっぱい書き込んである。御両親の部屋はL字に配されて独立してるんですが、庭を通してリビングが見渡せるんです。老人というのは弧立を嫌うでしょう。だけれども子供はうるさい。やっかいなんですよ二世帯住宅は。しかしこれは美事に解決してるんです。ホラ、一段高くしてあるでしょう。これだとリビングで子供が飛びはねても響かないんです。病気で寝ていたらドンドンという床の

響きはたまらないっていいますからね。

佐和子　ええ。よくうるさいと言われました。

野　本　心遣いが憎いんですよねえ。この設計図を基礎に、今の家族構成に合わせて僕設計します。御主人の希望の家を活かすようにね。

佐和子　いえ。これは使えません。

野　本　アレ？　嫌いですかこの家。

佐和子　建てるの私ではないんです。

野　本　は？

佐和子　ごめんなさい最初に申し上げなければなりませんでした。施主は内藤の姉夫婦ですの。

野　本　えー！　おねえさんなんですか。なんだ僕はてっきり奥さんだと。

佐和子　内藤の父も住む家なんです。この図面に内藤が描いたような、快適な老後を送れる住まいを造って欲しいんです。お願いできませんでしょうか。

野　本　奥さんはどうなさるんですか。

佐和子　私は――。

野　本　今までおとうさんの面倒を見てこられたんでしょう。

佐和子　あの――。変にとらないでください。姉夫婦が戻るまでの約束で――約束だったんです。ずっと海外でしたの。やっと日本に落ちつくことになりましてそれで――。

野　本　失礼。施主の内情には深入りしない。これが我々の鉄則でした。

佐和子　……。この図面いただけません？　できれば模型も。私が家を建てる時にはこの家にしますわ。寸分違わず。でも、無理ですわね。土地を手に入れるなんて夢のまた夢ですもの。

野　本　奥さんも住める家は可能ですよ。三世帯住宅。それぞれがちょっとづつ譲り合えば出来ないことはないです。

佐和子　……。いいえ。せいせいしてます。やっと解放されるんです。義父は舅としては最高のひとなんです。私、実の娘のように可愛がってもらってます。でもね、やっぱり他人。どっかで肩張って、無理があるんです。……やっと開放されます。

野　本　……。

佐和子　……。

ガラガラと玄関の開く音。

鈴子の声　遅くなっちゃったわあ。

佐和子　お願い！　設計図のことおっしゃらないで。

佐和子慌てて模型を包み込み、設計図と共に郡屋の隅に置く。
鈴子が健二郎と入ってくる。

鈴　子　レストランでバッタリ会っちゃって。ロンドンで懇意にしてた方なの。三年振りでしょ。ついつい話がはずんじゃって。ア、この方？　ずいぶんお若いのね。

佐和子　融さんの同僚だった河村さんのご推薦で、会社の設計部の方です。

野　本　野本です。

健二郎　お待たせお待たせ。全くね、女どものおしゃべりにはきりというものがない。三年分を一時間やそこらで語り尽くせる筈がないこと位わかってるだろうに。ペチャペチャクチャクチャ際限がない。

鈴　子　あらあ。あたしはあなたたちのお話が終るのにあわせてたのよ。西沢氏がおしゃべりってわかってらっしゃるのにあなたったらホイホイ合わせちゃって。

健二郎　よく言うよ。俳句だか短歌だか知らないがロンドンの、テムズのとか何とかペチャクチャやってたくせに。

鈴　子　句集よ。ロンドン時代の作をまとめたって。あなたが言ったのよ。西沢さんとはつなぎつけとけって。奥様の側から責める方が早いからって。だから好きでもない俳句を必死になって勉強したんだわ。今でもチンプンカンプンだけど。あたしはね。いつでもあなたの裏で協力してきたつもり！

佐和子　あの、奥の客間を用意しましたけどこちらでなさいますか。

健二郎　座敷にしよう。その前にちょっと敷地を見たいな。一緒に見てくれる？

鈴　子　あなたが見てどうするのよ。北も南もわからないでしょうに。

健二郎　だから見るのさ。駐車場の位置も決めなきゃならんし。ほら行きますよ！　（先に玄関へ向かいながら）前の道路何メートル？　ちょっと狭い感じだなあ。

野　本　（戸惑いながらつづいて）六メートルはあると思いますが……。

健二郎　そう？　そんなにある。

鈴　子　父さんは？

佐和子　それが。お昼の仕度してる間にいなくなってしまって。今日のこと、夕べ念押ししといたんですけど。

鈴　子　ほんとの所どうなの？　何か言って？　建て替えのこと反対かしら。

佐和子　……そのおつもりです。

鈴　子　そう。――あらいやだ！　健二郎たらあんな所から首出して。……フフッ。うれしそうな顔しちゃって。

佐和子　お茶、何がよろしいでしょうか。ケーキ用意してありますけど。

鈴　子　佐和子さん。

佐和子　はい。

鈴　子　怒ってるでしょあたしのこと。当然よね。父さんの面倒見てきたのあなたなんだから。

佐和子　いえ。融さんが亡くなった時に出ていかなければならなかったんです。今まで住まわせてもらって有り難いと思ってます。

鈴　子　あたしね……。てっきり出ていくと思った。母さん酷かったんでしょ。時々貰う母さんの手紙にいつもため息ついてたの。嫁と姑って、どうしようもないんだなって。

佐和子　おかあさんがあたしのことを……。

鈴　子　はたから見れば馬鹿馬鹿しいような愚痴なのよ。顔見てなら叱りつけることもできるけど、手紙って重くなっちゃうのよねえ。

佐和子　……病気のせいだと思ってましたから。

鈴　子　そう？　そうよね、いちいち気にする性格じゃお嫁さんやってられないわよね。

佐和子　……はあ。

鈴　子　フフッ。まさかまたここに戻ってくることになるなんなんてねえ。融が生きてたら思いつきもしなかったわ。

佐和子　……。

鈴　子　マンション買うつもりだったの。社宅ってうるさいのよ。いちいちまわりの眼気にしなきゃならないし。チラシを見てたら健二郎がね、父さんの土地があるだろうって。相続人だって。

佐和子　おにいさんが……。

鈴　子　土地というものに憧れがあるのよ。田舎の農家に育ったでしょ。だけど次男だし、実家はがっちり長男の浩一さんが継いでて、土地は一坪も譲らないって。分けたら農業やってかれないって。海外が長かったせいもあるのよ。仮りの住まいだから我慢もできた。だけどこの先ずっとコンクリートの共同住宅じゃ嫌だって。道から一歩入ったら全部自分のものだと言いたいって。言ってやったの。土地はあなたじゃなくてあたしのものよって。そしたらね、構わん。君の土地に僕が家を建てる。だから僕が家主だって！　まるで子供みたいなの。まあね、あたしにもまるっきり欲がないわけでもないし。父さん死んだら相続するのは確かにあたしなわけだしだったら早いほうがいいかなって。知ってる？　二世帯住宅だと税金軽減されるって。

佐和子　そうらしいですね。

鈴　子　よかった。あなただけはわかって欲しかったの。恨まないでね。

佐和子　おとうさんもきっと楽ですわおねえさんと同居の方が。

鈴　子　それはどうだかね。なにしろ二十五年離れて暮してきたし、他人も同然だもの。どう接していいかわからないわ。

佐和子　――……。

鈴　子　あなたが羨ましいわ。子供がふたりもいるんだもの。綾子ちゃんなんか頼もしい限りだし。

佐和子　子供は頼りにはなりませんわ。

鈴　子　そう？　あなた仕事持ってるから心丈夫なのね。あたし、この歳まで専業主婦できちゃったから他に何もないんだもの。健二郎についていくしかないわ。

佐和子　おねえさん……。

健二郎の声　オーイ鈴子！　ここ開けてくれ。ガラス戸だ。こっちからあがるから。

鈴　子　今いくわ。父さん帰ったらあっちに来るように言ってちょうだい。（去る）

佐和子台所へ行き、しばらくしゴトゴト動く気配がして、三人分のお茶の仕度をして奥へいく。

間。

からの盆をさげて戻ってくる。

背後で健二郎と鈴子の高らかな笑い声。フッとため息を吐き、上手のカップを下げにいき、盆に戻しながら摸型に眼を止め、包みのままテーブルに置いて、ソファに腰を降ろし、風呂敷をめくる。

模型の屋根をそっと取り外し、中をのぞき込む。

佐和子　……机が三つ……ベッドが三つ……。子供が三人……。融さんたら……。

健二郎の豪快な笑い声。

佐和子　……融の馬鹿……。

佐和子、ウッと顔を両手でおおう。

ウッ、ウッと、かすかな嗚咽。

五

前場より数時間後。

薄暗がりの中で佐和子がソファにぼんやり坐っている。

下手のテーブルに三人分の湯呑み茶碗やコーヒーカップ、ケーキ皿が置かれてある。

下手奥でギイ、バタンとドアの開閉の音。しばらくして忍び足で宗一が入ってきて壁のスイッチを押す。

灯りがつき佐和子に気付く。

宗一　ア……。

佐和子　……何処に行ってらしたんですか。おねえさんずいぶん待ってらしたのに。

宗一　うむ……。行くところなんかあるもんじゃないな。アハハ。わたしの行動範囲なんてしれたもんだ。……行くところがないんだ。うむ。この十五年、いや、定年退職からこっち、一泊旅行もしてない。

佐和子　……。これからは旅行できますわ。おさんどんも、留守番もしなくてよくなるんですから。いつでも、どこにでも、いっぱい。